曲亭馬琴著

傾城水滸傳第六編

歌川國安画

上帙卷之上

へ18
3087
15

へ13 特
3087
15

傾城水滸傳第六編序

無銭則緩有銭買不緩
但無銭之日之多是
安房殿稿已至於教学篇

毎編弓上帙二冊下帙二冊合本四冊

余曾ありふ水滸傳を載せる所張青孫二娘ホ十字坂の旅客を屠りてくめて肉包を粥菊ぐの一回その妓害残忍まつかれて極まり使是異邦の衰世兇賊ふあるべき所尤讀よ忍びるべき且亦武松が鴛鴦樓ホ張都監蔣門神ホを鹿金まるべき如くその殺戮数十人僕隷婢妾といふらくども一人とりて免れざるものなく火を放て愉快とするのその情態を寫せるのまことのれを義勇とべきを閑威天朝人の氣質の萬邦ホ捉れるとべきらえ就中曾我胞兄弟が富士の狩屋まで入りて父乃讐を報ずるが若き當時宿直の勇臣ホの防戦せるのホ當りてまことを斫るとまくべく十名狀れども僕隷婦女子を屠殺して刃を汚ちんるを欲せざるの故ホ時致ハ五郎丸よ生拘られるり是その智勇の足らざるまでは蓋五郎丸が女子の打扮をよく欺くこの時倘武松をして時致よ代らまあば五郎丸も亦免るとをえざるべし又水滸傳ある武松が蜈蚣嶺を過るとを道士師弟を救ゼをおのよ新よ得る戒刀よ譽ゆそ祭らんと欲せ原のこいはぐ彼師とその徒弟の悪人なるを知むるべく何ぞ殺せとの速るやむべく筑紫の御曹司いるとまあり五百千軍萬馬の窮陀の中ホ在とるとも當の敵まあらばいまべ堂言れを射ざとぞ勇士の本意とする所當まかるの如くなるべ今その忠孝義勇を舉ゲ水滸一百八の草賊ホよ比競を究まあらば我ども夜光燕石相似て非るこのとをを述ざるとをえば抑余が戯れよ著せる這冊子ハ水滸傳ある脚色を撮合して彼が理義よ違へる所繁り易とれを取ば用意豈帝豆尼のこまるを毎思ふこの意味ホ具眼人いかばべらを知べ

文政十二年己丑春正月吉日新版　曲亭馬琴識

草花園
結縷
長尻の居酒屋
客乃醉ぐ
きびれのきりぬ
ゆろびくり
天狗損二郎

みちのくの千府の
菅薦
山陰の
菅薦

秋の芝の花
萩を奪ひて
むらさきの
屋敷の
芝を
染る
岩藤
毛門神野衾
二藍紫苑

たまゝ鶴も
あぐら後家蛛の
長烟管
横嶋傳杖照行
野郎帽子
ちぐれ
てぞ
結ぶ
寒風後室
篠絲

洗垢離の裸はだぐ

能莫院 婆娑刺陀

辻角力

ひとをとの書いたちの珠数

便之仗豆風

掘返を初刊 埃乃蛍

地みまり今石る初る

墨とぞ

獨火星夕映 七の出千編

長庚星黄昏 七の出千編

損

竹
酒上
賣
善

損

吉

竹

實

善

書物錦繪暦問屋仙崔堂鶴屋喜右衛門版

傾城水滸傳 初編五編迄先達る賣出し第六編七編八編迄当秋の賣出より 歌川國安画 曲亭馬琴作

繪本漢楚軍談 初編〜五編迄通俗漢楚軍談を中国の様方に 共二十冊 山來 馬琴譯

當世役者水滸傳 歌川國貞画 藝道家の達者丸を豪傑水滸伝になぞらへて画本ものがたり

稗史水滸傳 初編〜六編迄 共二十冊賣出し 歌川國芳画 山東京山譯

水滸傳豪傑雙六 歌川國芳画 奉書一枚つぎ彩色すり画面に描く真の双六なり

水滸傳劇場雛形 初編鶴屋南北作 四冊 歌川國貞画

忠臣水滸傳 繪入十冊 山東京傳作 讀本 忠臣義士の義侠豪傑水滸伝にもとづき綴る新趣向なり 柳亭亭主名文乃張本なり